

第一章 二段目の水獄 (一〇)

自分(王仁)は寒さと寂しさにただ一人、「天照大神」の神号を唱え奉(て居)ると、  
にわかになんて暖かくなり、空中に神光輝(暉)きわたる間もなく、芙蓉仙人が眼前に現  
われた。あまりの嬉しさに近寄り抱付(とすれば)ると、仙人はついに見たこともない  
険悪な顔色をして、

『いけませぬ。大王の命なれば、三ツ葉殿、吾(我)に近寄っては今までの修業(御修行)  
は水泡に帰すべし。これにて一段目は大略探険されしならむ(ん)。第二段の門扉を開く  
ために来たれり』

と言いも終らぬに、早くもギィーと、怪しい音がした「刹那」と思うと、自分(王仁)は  
(既に)門内に投込まれて(居)た。仙人の影はそこらに無い。

ヒヤヒヤとする氷結した(氷の)暗い途を倒つ転びつ、地の底へ地の底へとすべりこん  
だ(むのである)。暗黒で何一つ見えぬが、前後左右に何とも言えぬ苦悶の音がする。はる  
か前方(と思)う所(に)女の苦しそうな叫び声が聞える。血醒さい臭気が鼻を衝(突)いて、  
胸が悪くて嘔吐(嘔吐)を催してくる。たちまち脚元がすべって、何百間とも知れぬよ  
うな深い地底(地底)へ急転直落した。腰も足も頭も顔も岩角に打たれて血塗(血泥)に

なつ(て了う)た。神名を奉唱すると、自分(王仁)の四辺数十間は(の面積)がや  
 や明る(明か)くなくなってきた。自分は(の)身体一面の傷を見て大いに驚き「惟神靈幸倍  
 坐世(惟神靈幸坐)」を二度繰返して、手に息をかけ(て)全身を撫(で)ぜ(さす)つてみ  
 た。神徳たちまち現われ、傷も痛みも全部恢復(回復)し(て了)うた。ただちに大神様に  
 拍手し感謝(を)奉(た)つた。(惟神靈幸坐の)言霊の神力で四辺遠く暗は晴れ  
 わたり、にわか(に)陽(あ)つてきた(のである)。

再び上(う)の方(ほう)で、ギーと音がした(と思)う(瞬間に、十二三人の男女(罪人)が転落し  
 て自分(王仁)の脚下に現われ、「助けて助けて」としきりに合掌する(のである)。自分  
 (王仁)は比礼(を)その頭上(目)が(見掛)けて振(ふ)つてやると、たちまち起きあがり「三ツ葉様」  
 (救世主様)と叫(な)んで、一同(を)合(あ)わして泣(な)きたてる(た)。一同(此一行)の中(中)には、  
 宗(し)教(き)家、教(き)育(いく)家、思(し)想(そう)家、新(しん)聞(ぶん)雜(ざ)誌(じ)記(き)者、薬(やく)種(しゆ)商(しょう)、医(い)業(ぎやう)者(も)混(ま)じ  
 の姿(すがた)は亦(また)も崇(す)高(こう)にして威(い)嚴(げん)ある女(め)神(がみ)の姿(すがた)と変(へん)化(か)した(一)同(いっ)一(いつ)行(ぎやう)は氷(こ)の途(みち)をとぼとぼ  
 と自分(王仁)の背(はい)後(ご)からついでくる(のである)。

瑞月

我にして信仰の花なかりせば

身もたましいも潰いしならん

亦もや崇高にして威嚴のある女神の姿  
 ……前章の初めに現れた「坤」の金神さま  
 のこと。